

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2013年6月1日

文責：JUN

事実を「みる」目を磨く

1 事実をみることの大切さ

5月18日、「学びの共同体」を目指す三重県内の教師たちが集う「三重学びのネットワーク」春季研究会を行いました。参加者は136名、午前10時から午後4時半まで、二つの報告と分散会、講演が行われました。

午前中、ある学校の報告に関する協議の最後に、わたしは次のようなことを述べました。「すべては、子どもの事実、授業の事実、教師の事実をみることから出発しましょう」

そうしたところ、午後に行われた「学びの共同体を目指す相談のための分散会」において、参加者から、「それはどういうことをみるということなのでしょう。そして、どのようにみるとよいのでしょうか」という質問が出ました。

授業において教師が心がけなければならないことは多々あります。そのなかで、「みる」ということは、もっとも心がけなければならないことだとわたしは考えています。それは、学びは一人ひとりの子どもの内に生まれるものだからです。どこがわからないか、どんなことでつまづいているか、どんな考え方をしているか、何に興味を抱いているか、どうして興味を失っているか、どんなことに心を動かしているか、どんな発見をしているかなど、子どもの学びの事実は一人ひとり異なります。しかも、わたしたちが目指す「協同的な学び」「学び合う学び」においては、それら一人ひとりに生まれるものがつながり合い、かかわり合います。そのつながりとかかわりがどういうものなのかは学びの実現に深くかかわります。ですから、教師は、できる限りの方法と感覚を駆使して、それらの事実をとらえる努力をしなければなりません。その最たるものが「みる」という行為なのです。

2 一人の子どもを「みる」

子どもを「みる」とはどういうことかについての質問に対して、わたしはできる限りの言葉で答えました。けれども、そういった説明的なもので「みる」ということの内実を伝えることはできませんでした。それはすべて具体的な事実の中に存在するものですから、具体的な事例で語る必要がありました。

そこで、この「たより」においては、最近見せてもらった授業のビデオ映像をもとに、「みる」ということについて述べることにします。

それは、「白いぼうし」という物語をテキストにした4年生の国語の授業でした。

映像が映し出されてすぐ、わたしは一人の男の子が目につきました。この子は、中央の列のいちばん前の席に座っていました。だから、カメラのアングルに入りやすく、実際に授業を見ていないわたしにも彼の動きがとらえやすかったのです。

この子は授業の半ばまで落ち着かない様子でした。あくびはするし、あっちこっちときょろきょろして学習に集中できない様子でした。もちろん発言しようという素振りはありませんでした。

ところが、彼の二人後ろの座席の女の子が教師の指名を受けて発言したとき、彼が後ろを向いてその女の子の顔を見ながら聞き始めたのです。このことをきっかけに、彼の視線が定まってきました。

大きな変化が生まれたのは、その直後でした。物語の登場人物である運転手の松井さんが運転席にある夏みかんを取りにタクシーに戻るのですが、そのとき「すっばいいいにおいが、風で辺りに広がりました」と書かれているのに対して、いいにおいがどのように辺りに広がったのかが話題になりました。何人かの子どもが語ったのは、タクシーの中にいいにおいが充満していてそれが外に漏れ出しているというものでした。そんな中、一人の子どもが「ドアを開けたのでにおいが広がった」と言いました。その時でした。落ち着きのなかったあの子が挙手をして発言を求めたのです。教師の指名を受けたその子は、次のように語りました。「あのさ、ドアを開けた時ってさっき言っとったけど、そうかもしれんけど、僕は、タクシーの窓を開けとって、そのまま走とって、においがぷーんと広がるとるかなと思う」

この子は、夏みかんのにおいがどのように広がっていったかに反応したのです。前に発言した子どもの「ドアを開けたとき」という考えを否定したわけではありません。文章に書かれているように車から降りた松井さんがあわてて車に戻って夏みかんを取り出しているのですから。けれども、この子は、それもそうだけど、夏みかんのにおいはそれより以前からタクシーの中に広がり、それが空いていた窓から外にあふれ出していたと想像したのです。そう思ったとき、この子のなかに「言いたい」という願望が沸き起こったのでしょうか。

彼は、この発言をしたことで物語を読む世界に入り込みました。それは、この後のこの子の様子を見ればはっきりと見てとれることでした。授業の後半、彼は何度も手を挙げます。その意欲的な姿は前半とは別人のようでした。

教師が、においについて尋ねられた松井さんが答えた「いいえ、夏みかんですよ」の「いいえ」の言い方はどういう言い方かと発問したとき、彼はどうしても言いたいというように手を挙げました。何人もの子どもがいるわけですからすぐ指名してもらえないのは仕方ありません。でも、どうしても言いたかったからでしょう、「いいえ」という言い方を少しふざけ調子で口にし始めました。わたしはそんなこの子の様子をながめながら、学級みんなに聞いてもらえる状態になったら、きっと彼なりの言い方をしたのだらうと思いました。

その機会は訪れなかったのですが、それでも、この子の授業への積極性は失われませんでした。それが証拠に、授業の終わりが近づいたころ、教師からグループになるよう指示が出

ると、だれよりも早くグループの形になろうと机をくっつけたのです。わたしはそれを目にして、これは、子どもは一つのきっかけで変わるといった典型のような姿だと思ったのです。

ところで、この子どもの意識が変わるきっかけになったのが夏みかんの「にょいの広がり」だったということは大変意味のあることでした。それは、この場面を読むうえで、「にょい」がもっとも重要なものだったからです。物語の発端はお客の紳士がレモンと間違えるほどの素晴らしい「にょい」です。読者はいきなりそのにょいを想像することからこの物語の世界に引き込まれます。その「にょい」は、単なる夏みかんのにょいではありませんでした。そこには、運転手の松井さんと松井さんのお母さんとのかかわりがこめられていました。そして、その「にょい」の素晴らしいみかんと、見も知らない子どものために、蝶々を逃がしてしまったその代わりとして帽子の中に入れるという展開になり、その際、「すばいいにょいが、風で辺りに」広がるのです。つまり、タクシーの中だけでなく車外にまで広がる「にょい」は、この物語の発端であるとともに、お母さんと松井さんとのつながりの象徴なのであり、そしてそれほどの夏みかんだからこそ蝶々の代わりとして役立つことになるのです。

そうだとすると、彼が語った「ドアを開けるよりも前から広がっていた」というイメージは、うんと大切なことだったのです。もっと大切に受け止めるべきものだったのです。もしそうしていたら、間違いなく彼はこの授業におけるキーパーソンになっていたでしょう。

子どもを生かすとはそういうことです。「仲よくしましょう」と百回言うよりも、こういうとっさの場でその子の「素晴らしさ」を発見し、大切に受け止めて、そういう考えを学びの場に出してくれたことを心から喜ぶことなのです。

3 わたしは何をみていたのか

これはある授業を目にしたときの一つの出来事です。しかし、よく振り返ってみると、わたしはこのとき、いくつものことを「みている」ことがわかります。

まずは、子どもの落ち着かない様子、学びに集中しない様子を見ています。これはそれほど難しいことではないのですが、そのときそれをどう見つめるかが大切です。参観者のわたしは、この子がこの後、学びにどのように入っていくか、または入れないまま終わるか、それをみようとしていたのですが、そこには、すべての子どもの学びに心を砕こうとしたわたしの思いが存在しています。この後のこの子の変化がわたしにみえたのは、この心の砕き方があったからにはほかなりません。教師としてこの心の砕き方ができるようになりたい、そのためこのような子どもの変化に気づけるようになりたい、気づいてどの子どもも生きる授業を実現したい、そう願いながらなかなかできない自分に何度も何度も落胆しながら、それでも取り組んできた授業者としての経験が、このときのみえ方をもたらしてくれたのです。

教師は、よく発言をする子ども、よい考えを出す子どもだけをみていればよいということでは決してないのです。すべての子どものことをみていなければならないのです。ですから、わたしは、教師たちにいつも言います。授業をしながら、一人ひとりの顔を一人もみのがさないようにみてください、そのとき、必ず目をみてください、と。

さて、わたしに「みえていた」ことは、それだけではありませんでした。そこには、もっと大切なことが存在していたのです。それは、子どもの考えとテキストとのつながりに関することでした。

わたしは、あの子どもは「にょいの広がり」に強い関心を抱いたことによって学びの世界に入ることができたと述べました。そして、その「にょいの広がり」が、この物語の読みにおいてどれだけ意味深いものであったかを述べました。つまり、彼の気づきの値打ちが「みえた」ということなのです。

すべての子どもが生きる、すべての子どもの学びを保障するということは、それぞれの子どもの考えに存在する値打ちを感動と喜びを伴って受けとめることによって可能になります。そうすれば、どんな子どもでも、学びに参加できるようになります。

では、どうすれば、子どもの考えに潜む値打ちが「みえる」ようになるのでしょうか。それについては即効的な特効薬はありません。もちろんわたしのみえていることもたかが知れています。そのたかが知れているようなみえ方でも、そこにはわたしの授業者としての歩みが詰まっているのです。長い時間をかけて育んできたものなのです。

先生方に願いたいのは、子どものことを一人ひとりみることにについては、今すぐにでも始めてもらいたいということです。誠実に、丁寧に、心をこめて「みる」ことに努めれば、それまで気づくことのできなかつたことがみえてきます。そのうれしさが、もっとみようという意欲になります。

子どもの考えの値打ちについては、学びの素材に対する専門性となつながることだけに、子どもをみるだけでは身につけません。教科書程度、指導書程度の知識で授業しては其の専門性はいつまでたつても培つていけないでしょう。学びの素材に対する研究と修養にどれだけのエネルギーをかけるか、それがカギです。その専門性と、子どもをみる目となつたとき、学びを「みる」目が確かになつていくでしょう。

ところで、「白いぼうし」の学級について後日談があります。授業映像による研究会から数日後、わたしは、授業者の教師と会う機会がありました。その際、その人がわたしのところにやつてきて、私の指摘を聞いたことから、あの子どもに対する対応が変わり、そうしたところ、その子がとっても喜び意欲的になつたのだということでした。その教師は、わたしの指摘を受けるまでそのようにこの子を「みて」いなかったと言いました。けれども、そう語るその人の表情は生き生きしていました。

立ち話で聞いたことなので、詳しいことはわかりません。けれども、わたしは、この教師の一言によつて、「みる」ということ、「みえる」ということが、どれだけ学びにとって重要なことなのかが証明されたと思ひました。そして、その教師の教師としての誠実さと確かさを思ひました。

「学びのネットワーク」でわたしが言つた「すべては子どもの事実、学びの事実、教師の事実から始まる」を、どの学校でもどの教師も心に宿して、「みえる」教師を目指していつてもらえたら、わたしとしてそれ以上うれしいことはありません。